

国後島鳥類専門家交流（2018年6月1～4日）
～国後島におけるガンカモ類調査協力体制の構築～

嶋田哲郎（（公財）宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

今回の国後島鳥類調査の目的は、1. 生息状況や保全にかかわる情報交換、2. 往復航路も含めた鳥類の生息状況調査と日露共同経済活動による風力発電候補地の視察、3. 今後の鳥類の共同調査、および風力発電などの経済活動と鳥類保全との両立に向けた意見交換である。調査団は沿岸・海洋域に生息する鳥類を専門とする6名（団長の白木彩子氏（猛禽類）、福田佳弘氏・西沢文吾氏（海鳥）、古南幸弘氏（シギ・チドリ）、嶋田哲郎（ガンカモ）、松田実希氏（白木さんの学生でオジロワシを研究））に加え、小笹純弥氏（通訳）、根上泰子氏（環境省・政府同行者）の2名を加えた計8名である。

国後島で観察されたガンカモ類及び保護区の専門家との情報交換によって得られた情報を下記のように種別にまとめ、今後の展開について述べた。

・コクガン

日本を含めた東アジアで越冬する個体群の繁殖地、中継地など渡り経路は解明されてなく、現在、衛星送信機などを用いた調査が継続されている。これまでの調査によって北海道東部の野付湾や根室半島北部、国後島のケラムイ岬などがコクガンの春の重要な中継地であることがわかってきた

国後島では、ケラムイ岬以外の北部太平洋側でも衛星追跡による位置情報をえられており、今回の沿岸域での調査では、コクガンの潜在的な生息可能性を評価した。1日目は古釜布南部の材木岩にいたるオホーツク海側沿岸域の調査であった。沿岸には多くのアマモ類、アオサ類が打ち上がっており、干出した場所ではアマモ群落が認められた。保護区の専門家によれば、沖合にアマモ群落があり、ホッカイシマエビがよく捕れるとのことだった。衛星追跡ではオホーツク海側からコクガンの位置情報を得られていないが、コクガンが生息する可能性が示唆された。

2日目は古釜布北部の荒島にいたる太平洋側沿岸域の調査であった。オホーツク海側沿岸と異なり、岩礁地帯が多くみられ、それらにフノリなど多くの海藻類が付着していた。函館湾ではコクガンは主に岩礁地帯に生息し、岩に付着した海藻類を採食する。また、ここでも多数のアマモが認められた。これらのことから、この地域もコクガンの生息地として適していると考えられる。

また、コクガンは真水の飲水、羽繕い、休息などを行うことができる、河川の河口域などの上陸場所を必要とする（Shimada et al. 2013）。調査した沿岸域には多くの河川が海に流れ込んでいた。堤防などの人工構造物などがいないため、人為的な影響がない中でこれらの行動をコクガンは十分に行うことができると推察された。このこともコクガンにとっ

て好適な環境であることを示唆している。

2014/15年より3年間、道東コクガンネットワークの呼びかけによって、国後島（主にケラムイ岬）と日本各地でコクガンのモニタリング調査がなされた。その結果、春と秋のコクガンの渡り時期において、ケラムイ岬と野付湾が重要な中継地であることが明らかとなった（藤井 2017）。その後も有志での調査は継続されており、ケラムイ岬でも調査が継続されている。

・シジュウカラガン

国後島ではシジュウカラガンは2018年5月18日に北部太平洋側沿岸地域で成鳥2羽が初記録された。また、6月3日に古釜布からおよそ3km北の放牧地で成鳥2羽のシジュウカラガンを確認した。国後島におけるシジュウカラガンの2例目の記録となった。また、足環は装着されてなかった。

シジュウカラガンは放牧地で草本類（おそらく牧草）を採食した。観察者が近づくと、警戒しつつ歩いてゆっくりと遠ざかる程度で、採食することに集中しているようであった。飛翔も確認されたが、遠くへ移動することなく、近くの牧草地に再び降り立った。

シジュウカラガンは千島列島で繁殖地し、それぞれの島を中継しながら渡りをすると考えられ、今後の観察情報が期待される。

・その他のガン類

衛星追跡などの渡り調査によって、コクガン、シジュウカラガン以外に、ヒシクイなども国後島を含めた千島列島に関連した渡りをしていると考えられるが、ヒシクイについては詳細な情報をえられなかった。保護区の専門家によると北部の白糠付近（爺々岳東）の湿地には多くのガンカモ類が集まるとのことだったが、アクセスが悪く、保護区の職員でも数年に1度程度しか調査できないとのことだった。

また、狩猟については、コクガン、ハクチョウ類は狩猟せずにマガンのみ狩猟することだった。また、かつては北部で狩猟が盛んであったが、今は禁止となっている。国後島では9～10箇所の狩猟区があるが、あとは保護区となっている。

1990年代のマガンの衛星追跡では春の渡りでマガンは北海道宮島沼からカムチャツカ半島へ直接渡る（Takekawa et al. 2000）とされてきた。しかし、日本ではマガンの個体数が増加し、北海道の春の中継地も拡大している。国後島でマガンが狩猟されていることは、国後島を含めた千島列島に関連した渡りルートがあることを示唆しているかもしれない。

・カモ類

カモ類はマガモ、ヨシガモ、スズガモ、キンクロハジロ、シノリガモ、クロガモ、ピロードキンクロが観察された。6月2日には東沸湿原周辺でヨシガモ2羽、スズガモ80羽、キンクロハジロ2羽を観察し、スズガモは繁殖しているとのことだった。また、6月3日の移

動中に池から飛び立ったマガモオス 1 羽を観察した。沿岸域ではクロガモがもっとも多く、オホーツク海側沿岸で 120 羽、太平洋側沿岸で 200 羽程度を記録した。加えてシノリガモが十数羽、ビロードキンクロ 1 羽が記録された。

・今後の展開

ガンカモ類は北部の白糠付近の湿地と南部のケラムイ岬に集中している。北部の湿地では多くのガンカモ類が観察される（コクガンの衛星追跡による位置情報もある）とのことだが、アクセスが悪く、調査が難しい。そのため、現時点ではケラムイ岬を中心とした調査が現実的である。ケラムイ岬など場所は限定されるが、ガンカモ類の個体数や分布の情報共有は可能であり、すでにコクガンでは実施しているが、他種でも合同調査を実施できる可能性がある。

最後に、本調査は一般財団法人 大竹財団の助成を受けた北海道鳥類保全研究会によるプロジェクト「北方四島における鳥類保全に向けた日露共同調査と協力体制の構築」の一環で、北方四島交流事業「特定非営利活動法人 北の海の動物センター 国後島鳥類調査専門家交流」として実施されたものである。